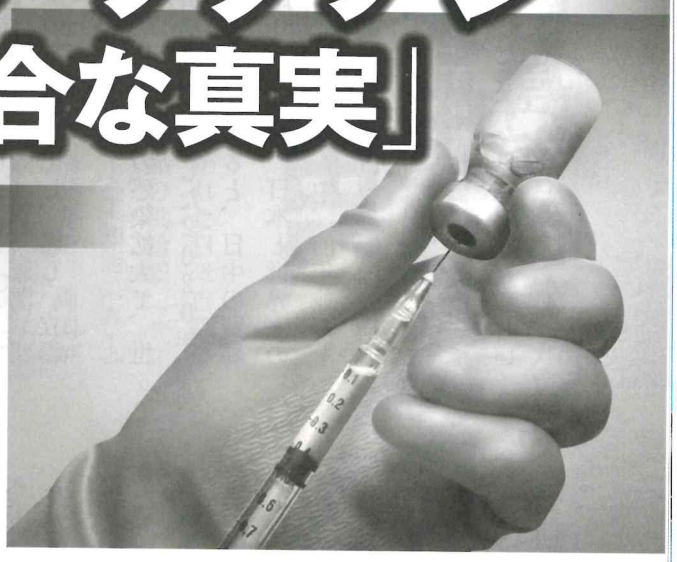
新型コロナワクチン 敢えて「不都合な真実」

倉澤治雄　科学ジャーナリスト

ワクチンの「安全性」確立には本来10年単位の時間がかかる。リスクから目を背けず、ネガティブな情報を掘り起こしてみた。



「核酸ワクチン」は実用化されたばかりの新技術

「ファイザーとモデルナの最終戦争が始まった」

ある製薬業界関係者の一言である。最終戦争の行方はスコット・ゴットリーブとアンソニー・ファウチの戦いにかかっている。ゴットリーブは医薬品の許認可を握る米食品医薬品局（FDA）の元長官だ。2019年3月突然辞任してファイザーの取締役に収まった。一方のアンソニー・ファウチは1984年から米国立アレルギー・感染症研究所（NIAID）の所長の座にあり、モデルナとともにmRNAワクチンの開発を行ってきた。感染症研究のドンである。

ファウチは20年11月、モデルナのワクチンを「驚くほど素晴らしい」と絶賛、自身もモデルナ製ワクチンを接種した。21年4月には「アストラゼネカのワクチンは不要」と発言して、まずはアストラゼネカを蹴落とした。

7月8日、ファイザーがブースター接種の許可申請を行うと、米疾病対策センター（CDC）とFDAは「必要性がない」とする共同声明を発表、ファウチもCNNで「不要」と追い打ちをかけた。これに対してゴットリーブはCBSテレビで「デルタ株を抑えるにはブースター接種の承認が急務」と反撃した。

ネガティブな情報やデータは「削除」

8月25日、ファイザーがブースター接種の承認を申請すると、モデルナも9月1日に追いかけた。これより先、8月23日にファイザーのワクチンが正式承認されると、25日にはモデルナも正式承認の申請手続きが完了したと発表した。ゴットリーブは8月25日、5歳から11歳向けのワクチン接種に向けて「9月にデータを提出する」とCBSテレビで発言、その直後の9月1日、子供への接種とブースター接種の承認手続きを進めていたFDAの重要幹部二人が突然辞任した。FDA内部にはワクチン承認に関する不満があったと伝えられる。日本ではモデルナ製ワクチンにステンレスが混入していた件が明らかとなった。そのモデルナの株価は20年1月の約20ドルから21年9月3日には416ドルと20倍以上に跳ね上がった。ワクチンメーカーは一貫して接種対象の拡大を狙っており、巨大化した市場をめぐって、メーカー同士の暗闘が続いているのである。

そもそもワクチン開発の成否は「有効性」と「安全性」で決まる。国立感染症研究所が8月31日に発表した「症例対照研究の暫定報

告」によると、6月9日から7月31日までの53日間に都内5カ所の医療機関で受診した1130人を対象に調べたところ、ワクチンの有効率は1回接種で48％、2回接種では91％だった。とくに2回接種してから14日以上経過している場合は、95％という高い有効率となった。また厚労省が65歳以上の高齢者について致死率を調べたところ、ワクチンを接種せずに感染した場合は4・31％だったのに対し、1回接種した人は3・03％、2回接種した人は0・89％と4分の1以下に留まることが明らかになった。ただし、ここでいう「有効性」とは「発症予防効果」である。「感染予防効果」は確認されておらず、「重症化予防効果」についても厚労省は「示唆する結果が報告されている」と慎重である。

ワクチンの持続期間については今年4月、ファイザーとモデルナが2回目接種後6カ月後の有効率を約90％と発表した。しかし藤田医科大学がファイザー製ワクチンを接種した209人の抗体量を調べたところ、「接種後3カ月くらいの時点で急激な減衰が見られた」という。また国立国際医療センターと熊本総合病院の共同研究でも2回目の接種から2カ月で半減することが分かった。抗体量の減衰が直ちに有効性の低下につながるわけではないが、持続期間は思いのほか短い可能性が出てきた。

一方変異株について国立感染症研究所がまとめたデータによると、英国由来のアルファ株、南アフリカ由来のベータ株、ブラジル由来のガンマ株、インド由来のデルタ株に対するファイザー、モデルナ、アストラゼネカの抗体中和能力はいずれも低下傾向にあることが判明した。とくにベータ株に対しては顕著に低下する。このように持続期間が短いことや変異株に対する効力の低下により、いわゆる「ブレークスルー（すり抜け）感染」が懸念されている。事実2回接種率が67％を超えたイスラエルでは3月にロックダウンを解除したものの、6月半ば以降、再び新規感染者が急増している。このためイスラエルでは3回目の接種となる「ブースター接種」がすでに始まった。

計1002人の死亡者との因果関係

「安全性」については依然、専門家の間で意見が分かれる。元国立感染症研究所の研究者は、「ワクチンについてのネガティブな情報やデータはTwitterやYouTubeから削除されるし、『Nature』や『The New England Journal of Medicine』などの学術誌からも排除されています」と語る。筆者は「ワクチン反対派」でもなければ「陰謀論者」でもない。しかしmRNAワクチンを含めたいわゆる「核酸ワクチン」は新しい技術であり、ワクチンの「安全性」確立には本来10年単位の時間が必要である。リスクから目を背けたまま、むやみに若年層に接種を拡大すれば、将来に禍根を残すことになりかねない。本稿では敢えてネガティブな情報を掘り起こしてみたい。

まずワクチン接種による死者の数である。厚労省のデータによると2月17日から8月8日までの173日間で、ファイザーのワクチンを接種後に死亡したケースは991件である。うち5件は「因果関係がない」とされたものの、986人は「因果関係が評価できない」との結果となっている。またモデルナでは5月22日から8月8日の79日間で11件発生し、「因果関係は評価できない」とされた。ではワクチン接種後の死亡者の発生について厚労省は、何と言っているか。

「『ワクチンを接種した後に亡くなった』ということは『ワクチンが原因で亡くなった』ということではありません」

「現時点でワクチン接種と因果関係があると判断された例はありません」

「日本で新型コロナワクチンの接種が原因で亡くなった人がいるという事実は確認されていません」

実に歯切れが悪いのは、因果関係を完全否定できないからである。ワクチン接種後の死者数はファイザーで100万人当たり19・6人、モデルナで1・2人となっており、無視できる数字ではない。ちなみに季節性インフルエンザ・ワクチンは毎年約2千万人が接種

しているが、ワクチン接種による死亡が疑われたケースは17年から18年のシーズンで3件、18年から19年のシーズンではゼロである。計1002人の死亡者リストを見ると、基礎疾患のある高齢者だけでなく、20代から60代の基礎疾患のない健康な人たちが多数含まれていることが分かる。こうした人たちを「因果関係は評価できない」と放置しておいてよいのだろうか。ワクチンは極めて多数の健康な人に接種することが前提だ。それだけに「安全性」の確立には厳しい姿勢で臨む必要があるだろう。

米国でも同様の問題が指摘されている。食品医薬品局（FDA）と疾病対策センター（CDC）が運用するウェブサイト「VAERS（Vaccine Adverse Event Reporting System）」は、個人が重篤な副反応を書き込むことのできるデータベースだ。VAERSによると9月3日現在、米国でワクチン接種後に死亡した人の数は7086人である。しかしロイターがファクトチェックしたところ、20年12月14日から21年7月19日までに1万2313人が亡くなっていたことが明らかとなった。果たして「社会の安全を守るための犠牲である」と言い切れるのか、議会でも議論が始まっている。

重篤な副作用の報告も後を絶たない。著名人が参加する「STOP The Shot（打つな）」が8月4日に開催したオンラインセミナーで、ファイザーのマイケル・イードン元副社長が「ラットの実験でワクチンが卵巣に集積した」と語り、出産可能年齢の女性への接種に警鐘を鳴らした。また免疫学の泰斗、ロバート・マローン博士はUSA TODAYとのインタビューで「ワクチンの効果が切れて、抗体依存性感染増強が始まる可能性が高い」と指摘、接種率が高い国ほど感染が拡大するリスクについて懸念を表明した。さらにはファイザーのワクチンを電子顕微鏡で観察すると、酸化グラフェンなど本来の成分と異なる物質が見つかったとの情報が伝えられた。真偽をめぐってネット上では論争が続いているが、果たして「誤情報」「偽情報」として切り捨ててよいものだろうか。「安全性」の確立には厳密な実証が必要であることは言うまでもない。

「誤・偽」情報と切り捨ててよいか

ある免疫学の専門家はワクチンに含まれるポリエチレングリコール（PEG）の危険性を指摘する。厚労省は副反応として頭痛を第一に挙げているが、原因のひとつがワクチンの成分であるPEGの可能性が高いと指摘する。スパイクタンパクをコードするmRNAは、人工脂質ナノ粒子LNP（Lipid Nano particle）に包まれている。LNPは表面にPEGをコーティングさせることにより、血液中での滞留時間を延長させるだけでなく、宿主の細胞と融合することを助ける。このため脳への物質移行を制限する血液脳関門（BBB）を超えて脳に到達する可能性が高まるという。脳の細胞がスパイクタンパクを作り始めると、誘導されたスパイクタンパクに特異的なT細胞が脳の細胞を破壊することになり、脳内出血の原因となる可能性がある。

ワクチンは筋肉に注射されたあと全身の組織に到達することから、あらゆる臓器で同様のことが起こりうる。心臓に至れば心臓の細胞を破壊することにつながりかねない。事実ワクチン接種後に「心筋炎」や「心膜炎」を起こした例が認められている。厚労省はその確率をファイザーで100万人当たり1・1人、モデルナで1・4人と発表している。

世界のワクチン市場はこれまでメルク、ファイザー、グラクソ・スミスクライン（GSK）、サノフィがシェア90%以上を占めていた。モデルナのステファン・バンセル社長は「心疾患やがんを含めて、すべての領域で治療が可能な巨大産業が誕生する。われわれはワクチン市場を完全に破壊することになるだろう」と語った。モデルナはすでにHIVやニパウイルスなど10以上のワクチン開発を計画している。しかしmRNAを含む「核酸ワクチン」は実用化されたばかりの技術である。ワクチンは多数の健全な老若男女に接種されるという事実を改めて心に刻んでおく必要があるだろう。Φ